
Shake

もりの華咲

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Shake

【Nコード】

N7872M

【作者名】

もりの華咲

【あらすじ】

どうしようもなく好きなのに、絶対手に入らない男がいる。男と過ごせる時間はあと僅か。そんなとき出会った別の男に心は揺れる。

「前々から一度聞いてみたかったんだけど、繭ってさあー、何で男
途切れないの？」

選択授業は面倒くさい。

隣に座る野木^{のぎ} 恵^{めぐみ}に眉を顰めながら、飯塚^{いづか} 繭^{まゆ}は心底そう思った。

世間的に見れば低ランクの公立高校。

進学コースの3年の選択授業に、受験とは全く無縁の情報処理なん
てものが組み込まれているのがそのいい証だ。それを分かっているな
がらわざわざこの授業を選択しているのは、進学コースにいながら
も、進学への意欲が全く沸かないという理由からである。

仲の良い友達全員、センター受験者向けの科目別集中コースを選
択した。今頃は必死で机にしがみついている頃だろう。

それに比べやる気のない人間が集まるこの教室は、授業中にこうし
てくだらない話が出来てしまうほど平和なのだ。

同じクラスの恵とは、高校入学当初こそ少し話す機会があったもの
の、今となっては同じ教室にいても全くと言ってよいほど接点が無
い。それでも選択授業に限り、数少ない同じクラスの人間のよしみ
で、こうしてたまに繭の隣に座っては、くだらない話を上から目線
で切り出し始める。

パッチリ二重の目、淡いピンクの唇。一体朝何時に起きるのだろう
？と思う綺麗に巻かれた黒髪が、繭の目の前で揺れている。

成績こそ繭に劣るものの、それ以外、特に外見では、確かに恵は繭
を遥かに上回っていた。

「選り好みしないから?。」

としか答えようがない。

同じ巻いている髪でも、こちらはただの天然パーマ。重たい一重の目に、痩せっぽちの身体。自分の容姿がいいからもてるのだ。なんて一度も思ったことはない。

実際、中学までは男子から敬遠されていたし、初めて彼氏と呼べるものが出来たのは、高校入学後に友達に無理やりされた化粧で、自分が意外と化粧栄えする顔立ちだと気づいてからだ。

「誰でもいいってこと?。」

「そうかもね。」

そうかもね。というか、そうなのだけど。

基本言い寄ってくる男とは、誰とでも付き合う。

大して可愛くなくとも、女子高生というブランドが好きな男は多いらしい。

おかげで、二股、三股なんてものは年中行事なのだが、相手も繭ごときに本気にはならないから特にトラブルが起こったことはないし、相手の要望はある程度のんでいるのだから文句を言われる筋合いもないと繭は思っている。

隣から同情とも軽蔑ともとれる視線が突き刺さり、繭はそれをあえて正面から受け止めた。

同性から見れば、いや異性から見ても、繭のような女はさぞかし尻軽に見えることだろう。まあそれは繭自身、痛いほど分かっているのだ。

「繭はそれで本当にいいの?。」

ヤレヤレとため息を吐きたくなる。

友達面して説教でも始める気なのだろうか?顔を寄せてきた恵の甘

つたるい香りが鼻についた。

「どういう意味？」

「だってそれって、繭は本当に誰かを好きになったことがないってことでしょ？」

テレビドラマの見すぎか、少女漫画の読みすぎか。よくもそんな科白を平然と言えるものだと感じする。

そもそも恵が科白の意味を本当に理解して使っているのかも、かなり疑問である。

この容姿なのだから恵は当然もてる。相手の外見ばかりを重視した恵の彼氏履歴は、繭の耳にも知らず知らずのうちにはいつてくるほど有名だった。

心配されなくても好きな人ぐらいいるから。

こうぼやいたのは、心の中だけである。口にだしてしまえば、恵に話題のネタを自ら提供してしまうことになる。面白おかしく言いふらされるぐらいなら、尻軽女だと陰口を叩かれるほうがまだマシだ。

目を開けていても浮かんでくる、サラサラとなびく栗色の髪。男のくせに透けてしまいそうな肌に、深い茶色の瞳。あの男を思ったびに繭の心臓は高鳴り、急激な眩暈に襲われる。

これを好きだと言わず何と言うのか。他に表現できる言葉があるのなら教えて欲しいぐらいだ。

曖昧な笑顔で恵に答えると、何を思ったのか、恵がパンツとPCデスクを叩き立ち上がった。

「よし、私が繭に本気で恋できる男紹介してあげる」

高らかと宣言する恵を見上げ、ポカンと間抜けに口を開いてしまう。

「野木さん、今一応授業中なんだけど・・・。」

白髪交じりの教師の情けない声に、クスクスと教室に笑いがおこった。

そんな周りのことなどおかまいなしなのか、恵がガシッと繭の両肩を掴み、前後に大きく揺らした。

「私に任せといて」

ぐらんぐらんと揺れる視界に、繭は思うのだ。

やはり選択授業は面倒くさい・・・と。

「いつらつしゃいませ。ご注文お決まりでしたらどうぞ。」

学校が終わればバイトの時間。

繭の働くファーストフード店は、全国展開しているような大きなチェーン店ではない。

お好み焼き、焼そば、うどん、ソフトクリームに、フライドポテト。何でもありの、広告すら出していない個人経営の店である。

それでもショッピングセンターの中に入っているということもあり、平日の午後や日祭日は、それなりには忙しかった。

同じ年代の制服デート中のカップルの注文を受け、すばやくキッチンにそれを伝える。

今の時間バイトは2人。主に接客を担当する繭と、主にキッチンを担当する中岡^{なかおか}圭吾^{けいこ}。

レジを終えた後は、繭は圭吾の補助にまわる。

ドリンクをカップに注ぎながらチラリと見た圭吾は、サラサラの髪こそ帽子の中に隠れているものの、透ける肌は汗一つ滲んでいない。女装をさせればさぞかし綺麗だろう。と思える圭吾を目当てに店を訪れる女性客は、あとをたたない。

繭にとって唯一の救いといえば、今のところ新規のバイトを雇う余裕がこの店にないことだ。

繭と圭吾以外は、長く勤めているパートのおばちゃんばかり。お陰で他の女に邪魔されることなく、こうしてのんびりと圭吾と同じ時間を過ごすことが出来る。

この店でバイトを始めたのは、繭が高校に入学して間もなくの頃。

その当時この店に圭吾の姿はなく、代わりに同じ高校の女の先輩が働いていた。

受験勉強を理由に先輩が店を辞めたのは、繭が2年に進級した春。入れ替わりで入ってきた圭吾は、その年、隣の市にある私立の高校に入学したばかりだった。

綺麗な子。

圭吾を初めて見たとき、繭は単純にそう思った。

異性に綺麗だという表現を使ったのは、生まれてはじめての経験だった。

来年の春になる前に、繭はおそらくどこかに進学を決め、この店を辞めることになるだろう。

そうなれば、もう圭吾に会うことも、こうしてチラ見することさえ出来なくなる。

代わりにはいつてくるのはどんな子なのだろうか。女であれば、圭吾はまたその女と関係を持つのだろうか。そう考えるだけで、繭の進学意欲はみるみると形を失っていくのだ。

年下の男に芽生えた淡い恋心。

思いを伝えることが出来る相手なら、どれだけ楽だったか。

「この後あいてる?。」

ショッピングセンターの閉店時刻を目前に控え、圭吾が耳元で囁いてくる。

例えあいてなくとも、圭吾のためなら無理やりにもあけるに決まっている。

さりげなく「あいてるけど?。」と答えながらも、繭の心臓は鼓動をはやめた。

「なら行こうぜ。」

「あー、うん。」

行こうというのが何処を指すかは分かっていた。

圭吾にこうして誘われるのは、初めてではない。

圭吾は特定の彼女をつくらない。だが誘われるのが自分だけではないことも繭は知っている。

いい男だけに。と言ってしまうえば真面目ないい男には失礼かもしれないが、中岡圭吾という男は、実に軽薄な男なのだ。

その軽薄な男に誘われて、あっさりとOKの返事を出してしまうのが繭なのだから、勿論偉そうなことを言う気など全くない。

「お疲れ様です。」

店長に声をかけ店を出た後、客がいなくなった薄暗いショッピングセンターの中を圭吾と二人で歩く。

閉店までバイトに入っている時には、ショッピングセンターの社員専用通路から、外に出ることに決まっているのだ。

出入り口の傍まで来ると、警備員室から警備員のおじさんが「お疲れ」と声をかけてきた。

このおじさん達ともすっかり顔なじみで、店の大事な常連客でもある。

「お疲れ様です。」

繭の中でのとびつきりの営業スマイルで警備員のおじさんに返し、出入り口の扉を開けた。

春の強い風をうけ、クセ毛が余計にぐしゃぐしゃになってしまう。隣で栗色の髪がサラサラと風に舞い、ストンと元の位置におさまっていた。

「ほら。」

ボスツと頭の上にのせられたのは、ハーフメット。

繭の家から店までは、目と鼻の先ほどの距離しかないので、学校が

終わり家で着替えた後は、いつもバイト先まで歩いて通っていた。一方の圭吾はといえば、バイク通勤。

圭吾の通う高校ではバイトが禁止されているらしく、人目を避けてわざわざこんな所まで通って来ているらしいのだけれど。

とつくに店の事を嗅ぎつけて遊びに来る圭吾ファンも多いというのに、いまだに圭吾がバイトを続けられていることが不思議でならない。

バイクに跨り圭吾の腰に腕を回すと、圭吾の香水の匂いが繭を幸せな空間へ導いていく。

10分もかからず辿り着いてしまうホテルまでの距離に、繭は幸せをしっかりと堪能するのだ。

通りの死角に入った場所にひっそり佇むラブホテルの利用客は、あまり多くはなく。

部屋もビジネスホテルのような粗雑なつくりで、わざわざパネルで部屋を選ぶ必要性がどこにあるのだろうと毎回首を傾げるが、その分料金は格安なので、繭たちのようにあまりお金がない人間にはもってこいの場所だ。

割り勘で料金を払い適当に選んで入った部屋で、圭吾が繭の首筋に唇を寄せてくる。

ゾクツと身体が反応し、クスリと笑った圭吾の息は、繭の反応を楽しむようにゆっくりと下へおりていく。

圭吾に誘われたときだけ、こうして誘いに応じてきた。

この時間だけが、圭吾が繭だけのものになる唯一の時なのだ。

深い茶色の瞳が繭を見つめ、「繭。」と何度も呼んでくれるかすれた声が、頭の中でボンヤリと響いた。

こんな時ですら、圭吾は繭を好きだとは言わない。そして繭も、そんなことは口が裂けても言えない。

都合がいい女。だからこそ、圭吾は繭を求めてくれる。

自分の気持ちを口にした瞬間に、今の関係があっけなく終わりを迎

えてしまのは分かっていた。
気持ちを感じ込めているのは苦しい。ただどこの関係を失ってしま
う苦しみを思えば耐えられる。圭吾に身を任せながら、繭は必死で
自分に言い聞かせていた。

「島村^{しまむら} 隆くん^{たかし}。K大の1年生でね、元の友達^{はじめ}なんだけど、優しいし、頭いいし、しかもカッコイイでしょ？かなりお勧め。」

自信満々の笑みを浮かべ恵が隣に立つ男を紹介すると、男がペコリと頭を下げ、極上のスマイルを繭に向けた。

「繭ちゃんよろしくね。」

白い歯がひかる、爽やかさを絵に描いたような男。それが逆に胡散臭い。圭吾に少しでも似ていれば希望はあったかもしれないが、残念ながら苦手なタイプだ。

恵と今日の約束を交わしたのは、3日前、学校の教室でのこと。

選択授業以外で恵と言葉を交わしたのは、3年になって初めてだった。

まさか恵が本気だったとは……。

男を紹介するなんて、あの場限りの話したとばかり思っていた繭にとって、これは意外な展開だった。

慌てて何だかんだと理由をつけて逃げようと試みたが、まさに後の祭状態。結局強引な恵の指示通り、こうして待ちあわせ場所に指定された公園に立っているのである。

すぐ傍を駆け抜けていく小学生の姿を見ながら、様々な意味を含めたお得意のため息が口から漏れた。

「ちょっと、繭ー。何でため息？ありえないでしょ？。」

気づかなくてもいいところだけはしっかりと気づく恵に苦笑してしまふ。

しかしこの男も一体何を思っているのか。爽やかスマイルを崩さない隆にチラリと視線を向けた。
元というのは恵の今の彼氏の名前である。

その友達というだけあって180近い身長に引き締まった身体。サイドをバツクに流し、前髪が長めの黒い髪。カッコイイと言われれば確かにカッコイイ部類に入るのかもしれない。腕からのぞいているブランドの時計は、大学生がつけるにはいささか高級すぎる気がするけれど。

「とにかく、あとは二人で楽しんでよ。私これから元とデートだから。」

繭としても恵が帰ってくれるのは好都合である。

見合いの仲介人のごとく薄い笑みを浮かべ手を振って去っていく恵を見送りながら、この場をうまく切り抜ける文句を頭の中で必死に探した。どこからどう見ても繭と隆が並んで歩くのは不釣合いなのだから、隆が繭を拒絶してくれれば楽なのに。と僅かに期待をしながら。

恵の姿が完全に見えなくなり、期待もむなしく何も動こうとしない隆にむかって口を開こうとした時。

「どこか行きたいところある？」

胡散臭い爽やかスマイルが繭の方を向いた。

「いえ、別に。」

そう聞かれてしまうと、「帰りたい。」とも言いつらい。だが咄嗟に行きたい場所など思いつくわけもなく。

「なら俺にまかせてよ。」

当然のように手をとられ、繭はポカンと隆を見上げた。

引かれるがまま進みだした足が、公園の乾燥した土を蹴り煙を巻き上げる。

完全にタイミングを外してしまった。だからこの手の男は苦手なのだ。

「縮毛矯正は初めて?。」

「・・・はい。」

繭の髪を手ぐしで整えながら鏡越しに話しかけてくる美容師の男の話し方は、やたら甘く馴れ馴れしい感じで嫌悪感が沸く。

「どれくらい時間かかります?。」

「4時間ぐらいかな。」

美容師に時間を確認した隆が、ケープを巻かれた繭の肩に手を添えた。

「4時間後に車で迎えにくるからね。」

「・・・はい。」

正直、どう反応していいものが困る。

というのも、隆の目的が繭にはさっぱり分からないからだ。

一体誰が、初対面初デートで美容室に連れて来られるなんて予測するのだろうか。

お金は全部自分が出すから。としぶっていた繭を強引にイスに座らせた隆は、一通りヘアカタログに目を通すと繭の髪型をこと細かく美容師に指示し、先ほどのセリフと共に美容室の外へと姿を消した。

自分の髪にパーマ液が塗りこまれるのを見ながらも、いまだ繭は納得がいかない。

彼氏や彼女に自分の理想を押し付けようとする人間は確かにいる。

だが繰り返し言わせてもらえば、隆と繭は今日が初対面なのだ。

勿論ただの気まぐれという可能性も消せないが、どちらにしろ、失礼に値しかねない行為。いじられる側の人間の意志は尊重すべきだろう。

爽やかスマイルの身勝手男。やっかいな相手と関わってしまった。脳裏に浮かんで消えない後悔の文字に、今日何度目かわからないた

め息が口から漏れていた。

「サラッサラでしょ？触ってみて。」

4時間も過ぎてみればあつという間である。

2度目のヘアアイロンをあて終えた後、繭の髪を手ぐしで整えながら美容師が自慢気に尋ねてくる。

縮毛矯正の存在は知っていたし、実際かけている人間も知っているが、こうして自分がかけてみると確かに凄いものだと思う。

あのポリウムとうねりは一体どこへいつてしまったのか・・・。
ストンと真っ直ぐおさまっている髪に触れると、指がなめらかに滑って通り抜けた。

「彼氏もきつと驚くよ。」

嬉しそうな美容師の顔に、ひきつり笑いでかえす。

二度と会うことがないかもしれない美容師に、彼氏じゃないですと必死で否定するのもバカらしい気がして、ここはスルーしておくことにした。

「いらつしやいませ。」と美容室の入り口の方から別の美容師の声が響き、繭の髪をいじっていた美容師が、入り口に顔を向け「あつ。」と声をあげた。

「お迎えがきたよ。」

肩をポンツと美容師に叩かれたと同時に鏡の中にうつったのは、こちらに向かつて歩いてくる隆の姿。

「どうですか？一段と可愛くなった彼女は。」

そうニタニタと笑う美容師を鏡越しに睨みつけたい気分になったが・・・。

「いいね、すごく似合ってる。可愛いよ、繭ちゃん。」

鏡の中の繭をしっかりと見つめ、恥ずかしげもなくそう言う隆に、寒気かはしるほうが先だった。

「あ……りがとう。」

勝手にヒクヒクと口元がひきつり、とてもうまく笑えそうにない。これが圭吾に言われた科白だったら、飛び上がるではすまないほど嬉しかったに違いない。

とはいえ、圭吾が絶対にそんな言葉を口にする人間ではないことぐらい、繭はよく知っている。

それでも何故か、無性に圭吾の顔が見たくなった。

「ありがとうございましたー。また来てね」

隆が会計を済ませた後、先ほどまで髪をいじっていた美容師の見送りに、ペコリと頭を下げてかえす。

また来ます。とは絶対に言いたくないので、あえてここは無言を貫いた。

そのぶん隆が「またお願いします」と例の爽やかスマイルを美容師に向けている。その手でしっかりと、繭の右手を掴みながら。

「車、そのコインパーキングにとめてあるから。」

手を引かれて歩き出した繭に拒否権はない。

外は夕暮れを迎えているというのに、女子高生を連れまわすのに何の疑問も感じないのだろうかと首を傾げたくなる。

もつとも、今日はバイトの予定もいれていないし、繭の帰りが深夜だろうが翌朝だろうが、繭の両親は気にも留めないのだけれど。

「せっかく綺麗になったんだし、次は服かな。」

ボソツと独り言を呟いた隆に、繭の中で若干焦りがうまれた。

「あー……。」

「ん?。」と向けられた顔には、やはり爽やかスマイルが浮かんでいる。

「そこまでしてもらわないといけないのか……何というか……。」

「うまい言葉が見つからない。せめてその胡散臭い笑顔だけでも何とかしてもらえれば、もっと脳みそも働くというのに。」

困って俯いてしまった繭の頭上から、隆の笑い声が響いた。

「気にしなくていいよ。女の子が可愛くなるのを見るのが好きなんだ。それに・・・。」

身体を屈め繭の顔を覗き込んだ隆が、視線を促すように顎で前方を指す。

「お金は持つてるから。とはいっても、親の金だけだね。」

笑う隆につられて顔をあげた先には、車のことなどよく知らない繭が見ても分かる高級車が、夕焼けにボディーを輝かせ停まっていた。

1、2、3・・・。

おった指が片手でおさまらない現実を見ると、繭は頭を抱え込んでしまった。

まばゆい太陽の光が、オープンテラスの白いカフェテーブルに注がれる。

繭の座っているテーブルの上には、飲みかけのオレンジジュースと、空になったコーヒークップ。

今はトイレに立っているが、ついさっきまで目の前でコーヒを飲んでいたのは、こうなる筈ではなかった相手、島村隆。

流されるままに重ねてきた隆とのデートは、すでに6回目を迎えようとしていた。

デートコースは、いつもきまってショッピング。それに時折、食事やお茶が+される。

ちなみに本日繭が身に着けているものは、すべて今までのデートで隆が買ってくれたものだ。足元には、このカフェに寄る前に通った店の紙袋が置いてある。

だから困っているのだ。

せめて身体の関係でもあれば、繭もここまでは困らなかつたかもしれない。

だが隆は、手こそ毎回つなぐものの、それ以上は何もしてこようとはしない。それ以前に、付き合う付き合わないの話すら、今だ曖昧なまま。

自分から誘ってみようか。

何も進んで隆と身体の関係を持ちたいわけではない。

見ようによっては、身体関係を要求されずただ貢いでくれているのだから、こんなにおいしい話はないのかもしれない。

だが繭は、よく分かっている。貢ぐ女にはなれても、貢がせ女になれるほどの価値は自分にはないことを。

隆とデートを重ねている間にも、圭吾や他の男とは関係を持っている。隆が他の男と同様に自分の身体だけを目当てに付き合ってくれるのなら、今の関係よりずっと楽なはずだ。

もう会わない。そう繭が言えば、隆は黙ってそれに従ってくれる気もする。だが押し付けとはいえ、これだけ貢がせてしまった相手にとてもそんなことは言えそうになかった。

ずるいのは分かっている。だからこそ、チクチクと沸いてくる罪悪感を感じながら、はつきりしない自分自身に苛立ちを感じる日々が続いていた。

「お待ち、繭ちゃん。」

頭上から聞こえた声に顔を上げると、やっと見慣れてきた爽やかスマイルがそこにある。

自分がさっきまで座っていた席に腰掛けながら、「これからどうしようか?。」と隆が問いかけてくる。

引いてしまっただろうか。だがそれならそれで、隆との関係をはつきりさせるチャンスなのではないか。

「二人つきりになれるところに行きたいな。」

繭が出せる最大限の甘い声。

こんなとき、二重のパッチリ目ならよかったと思う。自分が上目遣いをしたところで睨んでいるようにしか見えないだろうと、あえて隆を正面から見つめた。

いくら何でも隆がこの言葉の意味が分からないとは思えない。実際隆は、瞬間的に驚いたように目を見開いた。二人の間に続く沈黙。ひたすら隆の出方を待つしかない。

何を考えていたのか。宙を見上げていた隆が、レシートを手に立ち

上がった。

「行こうか。」

かけてきた声はいつも通り穏やかなのに、爽やかスマイルは浮かんでいない。そんな隆の様子に多少ビクつきながらも、黙って隆の指示に従った。

会計を済ませ近くに停めてあった車に乗り込む。いつも何かしら話題を提供してくる隆が、気味が悪いほど表情を動かさず無言でハンドルを握っている。

結局次に隆が口を開いたのは、ラブホテルの駐車場に車を停車させてからだった。

「念のため確認しとくけど。」

シートベルトを外しながらそう言いかけて、隆がふうーと息を吐く。「いいんだよね?。」

そんなにイヤイヤ抱いてもらう必要もないんだけど。

プライドを若干傷つけられショックを受けながらも、言葉を発さないまま繭はコクリと頷いた。それを確認してから車の扉を開けた隆は、やはり不服そうで、この人は一体何なのだろうと頭の中が混乱しはじめた。

女から誘われて引いたなら、はつきり断ればいいのに。

恵が隆は優しいと言っていたことを思い出し、恵も隆も優しさの意味を履き違えているのではないかと、怒りすら感じてしまう。とはいえ、自分の事を棚上げしている手前、今更やっぱりやめときますとも言えるはずもなく、車をおりて隆のあとに続いた。

いつも圭吾と使っているホテルより、値段も部屋もワンランクアップした写真パネルを眺め、隆の様子を伺う。ここまできても気乗りしないのか、隆もまた、無表情でパネルを眺めている。背後から聞こえてきた煩い女の声に、何となく嫌だな、と感じた。こういう場所では他の客と一緒にいるのは、気まずさを感じる。出来れば素早く

部屋を決め移動したいのに、隆は全く気にならないのか、まだ部屋を決めかねているようだった。

背後からの声が近づくにつれ、ほのかに香った香水の匂いには覚えがあった。よく聞けば、男の方の声にも聞き覚えがある。確認はしなかった。したくなかったが、気持ちと行動は時として一致しないものだ。いや、もっと奥底にあるものとは、きっと一致しているのだろう。

繭が顔を上げたのと、男がこちらの存在に気づいたのでは、ほぼ同時だったと思う。

「繭？」

圭吾のこういうところは嫌いだ。

特定の女をつくらない圭吾ならではなのかもしれないが、隣に誰がいようと何処であろうと、知っている人間に会えば見て見ぬフリが出来ないタイプらしい。もし連れてるのが彼女なら、直ぐにでも喧嘩の原因になりかねない。せめてこんな場所で会ってしまったぐらい、他人のフリをしてくれればいいのに。圭吾の性格を知っていながらそう思ってしまうのは、ワガママだろうか。

「奇遇だね、あはは。」

吐きたくなるほどのつくり笑いだった。

普段と何も変わらない様子の圭吾は、「奇遇だな。」とオウム返ししてくる。すぐ隣から「繭ちゃん？」と自分と呼んだ隆の声が、まるでるか遠くから聞こえてきた気がした。

「同じバイト先の・・・。」

そう言いかけて言葉につまる。以前同じようなことがあったのを思い出したからだ。

街でたまたま圭吾に会ったとき、「同じバイト先の子。」と圭吾が隣のいた女に繭のことを紹介した。この関係はいつまでたっても変わらない。何度身体を重ねても、圭吾と繭は、同じバイト先で働い

ている知り合いでしかない。

あの時とは違う、圭吾の隣にいる背の高い綺麗系の女が、圭吾の腕に自分の腕を絡ませ「早くいこうよ。」とせかす。

ふいに向いていた意識とは逆方向から腕を引き寄せられ、驚きのあまり瞬きを数回繰り返した後、上を見上げた。ついさっきまで無表情だった隆の顔に、いつもより更に極上の爽やかスマイルが浮かんでいる。

「同じバイト先の人なんだ？それは偶然だね。初めまして、島村です。俺と繭ちゃんの関係は・・・言わなくても分かるよね。」

挑発しているようにも聞こえる隆の口調。だが圭吾は、そんなものに顔色を変えるような男ではない。「どうも、中岡です。」とペコリと隆に頭を下げた後、面倒くさそうに隣の女をなだめながら、パネルに視線を流している。圭吾らしい反応だと思う反面、チクリと胸が痛むのは自分でもどうしようもない。

「それじゃ、お先に。」

圭吾たちに向けて笑顔でそう言う隆に腕を引かれ、半分引きずられながら着いて行く。乗り込んだエレベーターの扉が閉じると腕は開放され、隣の隆は、さっきまでの無表情な男に逆戻りしていた。

気づかれたらどうかと胸が騒ぐ。もしかしたら、圭吾だつてもうとつくに繭の気持ちには気づいているのかもしれない。気づいていてあえて気づかないフリをしているだけかもしれない。いくらうまく隠そうと頑張っても、まだそこまで大人にはなりきれていないのだ。

エレベーターを降りるとすぐに、点滅している部屋ナンバーが目にとまった。

このまま隆に抱かれていいのだろうか。と思う。隆に抱かれればこの胸のざわつきが少しは和らぐのではないか。とも思う。

足を踏み入れた部屋の扉が閉まる。カチャと鍵のかかった音がした。この瞬間全てがどうしてもよくなってしまふのは、いつもの事だ。

「隆……くん?。」

包まれた温もりがあまりに優しさを帯びていたので、つい名前を呼んでいた。

繭を自分の腕の中に閉じ込めた隆は、鼻をすすっているわけでも、身体を震わせているわけでもないのに、何故か泣いているように思えた。

「笑わないでよ、繭ちゃん。」

「え?。」

「そんな顔して笑うな。」

心臓がドクンと音をたてる。

やはり隆は気づいたのだろう。ひた隠しにしてきた繭の想いは、こんなに簡単に見破られてしまう。

恥ずかしさと情けなさと、それを隠すための苛立ちが一気に沸きおこる。

「もつと自分の気持ち大事にしなよ。」

「そんなこと隆くんには関係ない」。

隆の腕の中から逃れようとがくが、背中にまわっている腕の力が強くなり拘束される。どれだけ抵抗しても、もはや逃げ道はないように思えた。隆の表情を伺うことは出来ない。ただ一つ分かったのは、隆は繭を抱く気がないのだということだけだ。むしろこの人は、

「女の子が辛そうに笑うのを見るのは、嫌いなんだ。」

説教は嫌いだ。上から目線はもつと嫌いだ。だけどこの腕の中の温かさは、悪くなかった。

「余計なお世話だよ、それ。」

初めてだった。

ホテルまで来て、抱きしめられているだけでチェックアウトの時間を迎えたのも。男の腕の中で泣いたのも。

一度誰かに甘えてしまうと、自分をコントロールするのが難しくなるようだ。

手にしたバイトのシフト表を見つめ、ひどく疲れが襲ってきた。

繭の名前の隣には、必ずといってよいほど中岡の文字。今更ながら、きついな、と思う。

圭吾と過ごす時間が、好きだった。圭吾の働く姿をすぐ傍で見ることが出来るのは、自分だけの特権だと思っていた。一度知ってしまった甘い関係を、自ら切り捨てることは出来ない。それでも今は、きついな、と思う。

すぐそばににいるのに、手が届かない相手。自分の気持ちを隆に知られたことで、如実にそれを実感してしまった。分かっていたはずなのに。結局どこかで、僅かな期待を捨てきれずにいたのだろう。

「バカだよな。」

呟いた独り言が、身体に染みわたる。中岡の文字を指でなぞって、本当にバカだ、とあらためて思う。

だが、ガチャリと開いたドアの音に、そのまま思考も指も停止した。振り返った先にいたのは、簡単に予測出来た顔。夕立にでも降られたのだろうか、ブレザー姿の圭吾が湿った髪をかきあげた。

「あれ？何してんの。」

表にもいかず。という意味だろう。

店の制服には着替え終わっている。いつもなら、手の洗浄を終えて表に立っている時間だ。

「今暇だから、先にシフト表チェックしてといて、って店長が。」圭吾の顔をまともに見ることが出来ない。シフト表に目を戻しながらサラリと告げると、「あーそう。」と圭吾の声が、背中から聞こえる。

「見せて。」

すぐ後ろに気配を感じ、背中と心臓が一体化してしまう。伸びてきた腕が繭の頬をかすめ、長い指がシフト表を奪い取る。圭吾にとっては何でもない行為。いちいち翻弄される自分に腹が立つ。

「テスト期間は外してもらわないとな。繭のところは？テストあるんだろ？」

「あるには、あるんだけど・・・。」

偏差値の高い圭吾の高校では考えずらいかもしれないが、繭の高校の3年の定期考査は内申稼ぎのためだけに行われる名ばかりのテストである。センター組に余計な煩わしさを与えないため。その他進学組や就職組は、内申さえ稼げればそれでいいから。というのが、学校側の主張らしい。そのほとんどが推薦で決まるその他進学組は、内申を稼ぐ方が優先なのだと、個人面談のときに担任が自信満々に言っていた。つまりは、バイトを休む必要性を全く感じないのだ。簡単にそのことを説明すると、「へえ」と圭吾が口元を緩ませた。

「俺もそっちの高校に行けばよかったかな。」

冗談めいた口調から、本心ではないことぐらいつぐに分かる。「バカにしてる？」と笑いながら真意を問うと、「分かった？」とあっさり肯定された。

圭吾の高校に落ちて仕方なくこちらの高校に通っている人間が聞けば、憤るところでは済まないかもしれない。勉強があまり好きではない繭には、どーでもいい話だが。

「というわけだから。」

「え？」

突然髪を手で梳かれ、少しだけ解けていた緊張が戻った。

「来月は忙しいから、今日あたり行つとく？」

耳元でそう囁かれれば、意識しなくとも身体は竦む。

今までなら、一も二もなく圭吾を優先してきた。こうして誘われる

ことが、あれだけ嬉しかったというのに。

「ごめん、今日・・・見たいテレビが。」

咄嗟に言い訳を思いつかず、テレビって・・・、と心の中で自分にツツコんだ。誰かと約束があるとは言いたくなかった。実際、約束なんかないけれど、圭吾より別の誰かを優先していると思われるたくなかった。だからといって、他に言い訳になる用事を思いつくわけもなく、たまたま頭に浮かんできたのが、テレビだった。

「俺って、テレビ以下?。」

苦笑しながらも、それ以上追及してこない圭吾にホッとする。圭吾の誘いを断るのは今日が初めて。実は内心ビクついていた。二度と関係を持たないと言ってるわけではない。ただもう少し、傷を癒す時間が欲しい。

「着替えてくる。」と踵を返した圭吾を見送る。繭も表に出るために、休憩室の明かりを消した。

始まりは、注文の聞き間違えだった。次がレジの打ち間違え。最後に巻きすぎたソフトクリームを完成させたところで、店長から「もう上がっていいよ。」と声がかかった。

「飯塚さん、身体の調子でも悪いの?。」

身体のどこにも異常はない。ボーツとしていたわけでも、ひどく不安定な状態を持続していたわけでもないはずだ。ただミスをした瞬間には必ず、視界の中に圭吾がいたというだけだ。バイトの初日ですら、こんなにミスはしなかったというのに。男一人に、ここまで振り回されている自分が恨めしい。

「いえ、大丈夫です。すみません。」

「あとは片付けだけだし、中岡と二人で大丈夫だから。今日は早く帰って身体を休めなさい。」

店長は嫌味でこんなことを言う人ではない。本気で心配されているんだと、申し訳なさで一杯になる。これ以上自分がここにいるても迷

惑をかけるだけだ。店長の優しい言葉に甘えて、先に上がらせてもらうことにした。

「すみません、それじゃお先に失礼します。」

すでに片付け作業に入っていた店長と圭吾に声をかけると、「お疲れ様。」と返ってくる。

重たい足を引きずりながら、自宅トイレのスペースすらない更衣室で着替えを済ませた。

店の外に出てからも、一向に足は動かない。

片づけを終えて出てくる圭吾を待つために、圭吾のバイクがとまっている駐輪場の隅にしゃがみこむ。圭吾にもたくさん迷惑をかけてしまった。せめて一言ぐらいきちんと謝らないと、帰るに帰れない、そんな気分だ。

近づく夏を意識させる、なまると暑さは気持ちが悪い。

明日は雨がふるのだろうか。

星も月も出ていない夜空を見上げ、寒くもないのに自分の腕をさすっていた。

7分袖の白いカットソーは、隆に買ってもらったもの。女の子らしいデザインなんて、自分には似合わないと思っていた。最近服の趣味が変わったのには、間違いなく隆の存在が影響している。隆の選んでくれた服は、よく似合っているといつも周囲から褒められる自分が似合うと思うものと、他人が繭を見てそう思うものとは違うらしい。隆に出会って、初めてそのことを知った。

開いた携帯電話は、ショッピングセンターの閉店時刻を表示させている。

こちら側から照明を確認することは出来ないが、警備員室隣の専用出入り口から、一人、また一人と家路につく従業員の姿が目に入る。しばらくして出入り口から出てきた圭吾の髪は、すっかり乾いてサラサラと揺れていた。薄暗い照明でも、白い肌は透き通る。本当に嫌味なぐらい綺麗な男だ。

「あれ?。」

しゃがみこんでいる繭に気づいた圭吾が、バイクに荷物を放り投げ、繭のもとに近づいてくる。すぐ目の前に同じようにしゃがみこみ、茶色い瞳が繭を映す。

「具合悪い?。」

店長の言葉を真に受けているのだろう。繭は首を横に振ると「ううん。」と返した。

「何か、ごめんね。いろいろ迷惑かけて。一言謝るときたくて待ってた。」

テンションの落ちた声は、自分で聞きとるのが精一杯なぐらい小さくしか出ていない。それでも圭吾は聞き取れたようで、「別に。」と素っ気なく返しながら、繭の髪に腕を伸ばす。クルクルと指に髪を巻きつけて遊んでいたのは、ほんの僅かな間。

「痛っ。」

急にグイッと引つ張られて、痛みで顔が歪んだ。

「この髪って、あいつのせい?。」

「あいつ? ってか何? 離して。」

「この間の島村とかいう男。あいつのせいなんだろう?。」

「違うつてば。本当に痛いから、離してよ。」

目に涙まで浮かぶのに、圭吾は髪を離そうとしない。表情を変えない綺麗な顔は、何も伝えてはこない。

引つ張られた髪ごと顔を持ち上げられ、そのまま束で抜けてしまうのではないかと思うほどの痛みがはしった。

「あいつは止めとけ。」

「・・・何で。」

「気にいらない。」

髪を離されたと同時に引き寄せられ、そのまま唇を塞がれる。

噛みつきそうな勢いのキスに、頭の中がボンヤリとしてくる。ねっとりと、でもしっかりと絡んでくる圭吾の舌。二人の唾液が混ざり合い、音をたてる。

らしくない。

こんなに何かにこだわる圭吾を、今まで一度だって見たことがない。

「似合わない・・・その服も・・・髪も。」

唇が少し離れた瞬間に、圭吾の口元が苦しそうに動く。

「男一人の為に貞操ぶるとか・・・。」

すぐにまた塞がれて、離れる。その繰り返し。

圭吾が何を言いたいのか。なぜ隆にこだわるのか。呆けた頭では、答えは到底導き出せそうにない。圭吾を覚えている身体だけが、そのままの圭吾を受け入れていた。

「そんなつまらない女じゃないだろ？繭は。」

今日は一体なんだというのだろう。

繭も圭吾も、全然らしくない。

朝から空は、どんより雲に覆われている。いつ雨が降り出してもおかしくない天気。

折り畳み傘を携帯するため大きめのバッグを選び、玄関の鏡の前で上から下まで全身をくまなくチェックする。

甘辛さを意識した、小花柄ワンピースに薄手のJK。若干化粧が濃いかもしれない。

気合いをいれすぎただろうか、子供っぽくないだろうか。考えれば考えるほどキリがない気がして、前髪を手で整え玄関の扉を開けた。

もう会うことはないかもしれないと思っていた。実際昨夜まで、隆からの連絡は一切途絶えていた。この所忙しかったと昨夜の電話で隆が言っていたが、忙しかった理由までは聞いていない。

あれだけ泣いてしまったのだ。気恥ずかしさは当然ある。それでも、会いたくないとは思わなかった。

空は重いというのに、足取りは軽い。たぶん自分は浮かれている。だけど、何故？そこがよく分からない。圭吾を想うほどの恋愛感情が隆にあるのかといえば、絶対ないと断言できる。それなのに、浮かれている。鼻歌まで歌ってしまう。昼過ぎにバイトが入っているから、時間はあまりない。だが隆がそれでも構わないと言うので、バイトの時間まで一緒に過ごす予定だ。

待ちあわせ場所である駅の傍まで来て、携帯電話で時間を確認した。約束の時間にはまだ少し早い。とはいっても20分近くも。

隆は家まで送り迎えをしたがるが、そこは断固として拒否している。男に自宅を教えないのは、自分の中のルール。なんて、実はそんなにカッコいいものではなくて、終わりのことを考えるのだ。始まる

前から、終わったあとのことを考える。いかに綺麗に関係を断ち切るか、優先順位が他人と逆だ。それでも携帯番号を知っている隆は、まだマシなほう。今まで関係をもった中には、メルアドでしかやり取りをしていない相手も普通にいた。終わりを考えたくない相手は、ただ一人。中岡圭吾、彼だけだった。

休日だなー、と思う。

軽装の人たちが足早に行き交い、駐車場は車で埋まっている。

中心部の駅ほど大きくはないけれど、この周辺では、ここの駅が一番利用客が多い。

数年前に建てられたカラクリ時計は、出番を待ちながら時を刻んでいる。設定された時間になると、軽快なメロディーと共に、時計台の中から出てきた人形達が踊り出す。

建てられた当初は物珍しさもあって、人形達が出てくるたびに周りを人が囲んでいたが、今では誰も見向きしない。誰も見ていないのに、人形はやはり軽快に踊る。それを時折、淋しく感じる。

分かっている。仕方がないことだ。珍しいだけではいつか飽きられる。魅力を失わないもの、都合が合うもの。残っていくのは、そういうものだけだ。

世の中に不要なものなどない、と誰かが言っていたが、不要になるものはあると思う。見られていない飾りなど、必要があるとは思えない。労力をかけ、お金をかけ、これだけ精密に作られたからくり時計でさえ、誰の目にもとまらなければ、不要なものでしかなくなってしまうのだ。

何を感傷的になっているのか。時間が余るというのも考えものだ。隆がいつも繭を待っている場所に視線を移すも、隆の姿はまだそこにはない。その場所に向かって歩きながら、念のため駐車場にも目を配らせた。

「ない・・・か。」

仕方なく人目にさらされ待つ覚悟を決めたとき、一台の車が駐車場

のバーをくぐろうとしているのが目に入った。おとなしく待っていればよかったものを、繭の足は、車に向かって歩き出していた。

空きスペースを探していた隆の車が、立ち去ろうとする車と入れ替わりにその場所へ停車する。

運転席からおりた隆と、助手席からおりてきたもう一人の男。男の事は知っている。とはいっても一方的にこちらが見かけたことがあるという程度なので、相手は繭の顔など知りもしないだろう。イチヤイチヤと腕を組んで街中を歩いていれば、嫌でも目に入ってしまう。隣を歩いていた女が恵であれば、なおさら。

車との距離はどんどん近づくが、繭に背を向けて話しをしている隆と元は、歩いてくる繭には気がつかない。聞こえてきた会話で、どうやら元もここで恵と待ち合わせをしているらしいということは分かった。元が車を持っているのか、いないのかは知らないが、隆に便乗せてもらったのだろう。

声をかけようか迷う。話しが繭のことに及んでしまった今となっては、特に迷う。

盗み聞きするつもりなどなくとも、隆たちのすぐ後ろに停まるワゴン車の背が高すぎて、繭の姿を隠してしまう。

タイミングを見計らうしかないかと、誰も乗っていないことをいいことにワゴンに凭れた。

「じゃあ順調なんだ？繭ちゃんとは。」

「そうだね、仲良くやってるよ。」

「そうか、よかった。実は少し心配してたんだ。」

「心配？」

「隆に無理させてるんじゃないかって・・・。」

「いや、無理なんて。」

「ならいいんだけどな、恵のワガママに隆を巻き込むのはどうもな・・・。」

「彼女に向かってワガママはないだろ。恵ちゃんには、感謝してる

よ。」

「それ、本気で言ってるのか?。」

「・・・何が言いたい?。」

「隆、お前惠のこと・・・。」

「繭??。」

思いがけず呼ばれた自分の名前に、心臓が跳ね上がる。

惠がすぐ目の前まで来ていたことなど、気がつきもしなかった。

二人の男の顔は、この位置からは確認できない。だけどきっと、焦っているだろう。繭がいつからここにいたのか、気になっているに違いない。

とりあえず、ニコリと笑って惠に答える。

この状況を説明する言い訳など、何も思いつかない。

「どうしたの?こんなところで。」

余計なことは聞かないで欲しい。訝しげな惠の視線に、そのままを答えるしかなさそうだと諦めた。

「隆ちゃんと待ち合わせしてて。でもなんか声かけづらかったから。」

「よかったのに、声かけてくれて。」

いつの間にこちらにまわって来たのか、惠の肩を引き寄せながら元がニコヤカに笑う。その隣の隆も笑顔だが、気まずさを隠しきれてはいない。

何も知らない惠は暢気なもので、元にベタベタと甘えながらも、元と繭の紹介を始めた。

パツチリ二重の目、淡いピンクの唇。今日も綺麗に巻かれた黒髪は、惠が動きたびに愛らしく揺れる。

隆が好きになるのも無理はない。やはり惠は、可愛いのだから。

「ねえ、せつかくだしこれから4人でどこか行かない?」

無邪気な惠の提案に、思わず眉を顰めていた。

「ごめん、私バイトの時間が早まっちゃって・・・。」

こんな格好をしてきておいて、今更何を言ってるのだろうと自分で

も可笑しくなる。だが押し切るしかないのだ。押し切らないと、泣いてしまう。

「それだけ言いに来ただけだから。電話でも良かったんだけど、運転中だと悪いし、ついでだったし・・・だから・・・えーと・・・もう行くね。」

しどろもどろに早口で捲くし立てる。

これでは恵さえも変だと思うだろうに、考えている余裕がなかった。

「そ・・・、そう?。」

「繭ちゃん、俺バイト先まで・・・。」

「あ、いいから。すぐ近くだし、友達も一緒に行くし、ごめんね、隆くん。元くんも恵もごめん、それじゃ。」

歩き出す準備を終えていた足は、その場を逃げるべく加速しはじめる。

動悸が激しいのは、運動不足のせいだろう。心臓の音がなりやまな
いのも、きつとそのせいだ。

傷つくはずがない。傷ついていいはずがない。

繭だって隆と同じ。圭吾を想いながら隆と会ってきた。

隆に圭吾の姿を重ねたことも何度もある。隆も、おそらく同じだろう。

だから繭に、服だバッグだと買い与えたのだ。恵にしたかったことを、そのまま繭にしてきたのだろう。

だが隆は分かってもいたはずだ。繭では恵の変わりにはなれないことを。だから抱きたくなかったのだ。

あの時、圭吾に会ったホテルで、隆は繭に何を見たのだろう。隆はやはり、泣いていた。自分と繭が抱えているものが、同じだと気づいてしまったから。隆は、自分を守ろうとしていたのだ。自分を守るために、繭をあれほど優しく抱きしめたのだ。

立てた仮説は、見事に隆の不可解な行動と一致している。隆を問い詰めれば、おそらく仮説通りの答えが返ってくるだろう。

こうなってしまったのは、誰の責任でもない。しいて責任があると

すれば、最初に恵の申し出を断れなかった、繭自身だ。

それなのに……。

誰かを逆恨みしたくなるほど動揺している。行き場のない怒りと孤独感が、おさまることなく募っていく。

一人でいるのがたまらない。誰かに自分を見て欲しい。不要なものにはなりたくない。

繭は手にした携帯電話をきつく握りしめていた。

アドレス帳から、一件の番号を呼び出す。

まだ一度も、かけたことがない番号。

通話ボタンを押すとすぐに、呼び出しのコールが響く。1回、2回、3回……。

一体何がしたいのだろう。

どうして今、圭吾なのだろう。

「もしもし、圭吾？今からちょっと出て来れない？」

まさか本当に来てくれるとは……。

呼び出したのは繭だ。全く期待をしていなかったと言えば嘘になる。それでも信じられないものは信じられない。圭吾とこういう時間を過ごせる日が来るなんて、今までは想像すらしていなかったのだから。

圭吾と繭の関係を言葉にするなら、セフレというのが一番しっくりくる。圭吾に誘われたときだけホテルに行き、2、3時間楽しんだらサヨナラという間柄だ。その間の繭の胸のうちなど、この関係には何も影響を及ぼさない。しつこいほど言わせてもらえば、繭から圭吾を誘ったことは一度もないし、まして、休日をこうして一緒に過ごすことなど、まずありえない。

圭吾と二人で過ごす「ホテル。公式化してしまっている決まり事が、こつも簡単に崩れるなんて……。

繭も圭吾もこの後すぐにバイトに行かなくてはならないのだから、ホテルに行く時間も体力的余裕もなかったのは確かだ。だが、行く場所に困りカラオケに行かないかと誘った繭に、圭吾が黙ってついてきたのは、意外だった。

圭吾は何も聞こうとはしない。今まで一度も起こらなかったことが起こっているというのに、何の疑問も持たないように見える。もしかしたら、今までだって誘えば来てくれたのかもしれない。あるいはないことだと、勝手に思い込んでいただけかもしれない。繭が圭吾に突然ホテル以外の場所に誘われたとしても、疑問には思うだろうが行くだろう。お互いに特定の恋人はいないわけだし、よく考えれば、やましいことなど一つもないのだ。

自分から手を伸ばしてはいけない人、手を伸ばしても届くことがない人。繭の中の圭吾は、いつもそういう存在だった。だが、実際の

彼は違うのだと思う。神様でもテレビの中のアイドルでも何でもない。普通の私立高校に通う高校生であり、友達がいて、遊ぶ女がいて、バイトで小遣いを稼いでる、どこにでもいる男なのだ。そして、繭も。男癖が悪いというだけで、どこにでもいる普通の女子高生なのである。勿論、そんな誰でも分かるようなことに今更気がついたところで、繭の中の圭吾の位置が変わるかといえば、おそらくたいした変化はない。問題なのは、自分の気持ちのほうだ。自分は圭吾とどうなりたかったのか、圭吾に何を求めているのか。たったこれっぽっち距離が縮まったというだけで、ひどく戸惑っている自分がある。好きなのに、好きなはずなのに。何かが胸の奥に、つかえる。

マイクを握りながら、目は画面の歌詞を必死に追う。必死に追いながら、意識は別のところにある。

圭吾はいえ、パラパラと曲本をめくっていた。結構長い付き合いだと言うのに、圭吾が歌うところすら今日初めて目にする。

今まで繭は、圭吾のことを積極的に知ろうとはしてこなかった。一定に保たれた距離で、目に見えるものだけを好きになり、与えられるものだけを受け入れてきた。だけど本当にそれでよかったのかと、隆のことが頭を過ぎる。隆が繭にしてきたこと。恵と一緒にしたかったこと。そういう意味では、隆と繭は異なっている。受け入れる繭と、与えたい隆。どちらがどうとは繭には言えないけれど、きつと隆は、繭以上に苦しんできたのではないだろうか。繭にこれだけよくしてくれたことを考えれば、隆の気持ちの大きさは聞かなくても分かる。好きな女が友人の彼女。この近すぎる距離で、彼を何を思い、何を呑みこんできたのだろう。与えたい気持ちが大きすぎるが故に、見たくないものを数多く目にしてきたのではないだろうか。

聞きなれた音が部屋の中にながれる。

カラオケ機器が出す音ではない。音源は、繭の携帯電話。

表示されている名前に苛立った。バイトだと言ってきたのだから、出る必要はない。必要はないが、繭は通話ボタンを押していた。

「もしもし、恵だけど。」

表示されているのだから分かっている。何の用だと聞けば、「ごめん。」と謝罪される。

「繭の様子がおかしかったから、元に聞き出したんだ。本当、ごめんね。でも、隆くんも隆くんだよ、それならそうと最初から言っ
といてくれればいいのに、そしたら私だって繭に紹介なんてしな
ったのに。次は絶対大丈夫だから。今度こそ繭が本気で好きになれ
る人を・・・。」

恵は本当に真実を聞いたのだろうか？もし聞いたのならば、何故隆を責めるようなことを言うのだろうか？。

もし繭が圭吾に同じことをされたら、圭吾に圭吾の友達と付き合っ
てくれと言われたら、隆がそうしたように圭吾の要望に応えていた
と思う。

苦しかろうが、辛かりうが、好きな人がそう望むのだ。好きな人が
望むから、繭は望みを受け入れる。当然隆もそうしたのである。受
け入れることで、恵に与えたのだ。優越感や、満足感、そんなくだ
らない恵が望むものを、隆は惜しみなく与えた。

繭は知っている。

初めて会ったあの日、美容室の鏡の中の繭に向かって、こそばゆい
言葉と共に向けられた笑顔。

買い物に行けば、身に着ける当人より楽しそうに、あれだこれだと
物色している姿。

繭の世代が好む店には、現役高校生である繭よりも、隆の方が数倍
詳しかった。

馬鹿な男だ、可哀想な男だ。だけどそんな隆を嫌いになれない。

「もう、いいから。ごめん、忙しいから切るね。」

恵の返事を聞く前にボタンを長押しし、そのまま携帯の電源を切っ
た。

これ以上話をすれば、自分を抑える自信がなかった。

「あの男と何かあったのか?。」

「え?。」

電話を切った途端、話しかけられて気がつく。圭吾は繭を真っ直ぐ見据えていた。何故か隆にこだわっていた圭吾だ。あの男というのは、間違いなく隆のこと。

「何もないよ。」

何もない。隆が恵を好きだという事実が分かったただけだ。繭と隆の間には最初から何もない。

ボタンツとテーブルに落ちた雫に、これは何だろうと思う。

頬を伝って落ちた液体を、涙だと認める理由がなかった。

「俺にどうして欲しいわけ?。」

軽く頭を掻きながら、めんどくさそうに圭吾が言う。

「どうもしなくていいから、バイトの時間まで一緒にいてよ。」

とにかく一人になりたくない。ただそれだけだ。

「忠告も聞かなかったくせに?まさかと思うけど、俺、あいつの代わり?。」

「そんな・・・。」

そんな言い方しなくても・・・。悲劇のヒロインが発しそうになった言葉は、凍りつきそうな視線に遮られる。圭吾が繭を軽蔑しているのが、はつきりと伝わってきた。

「知ってるだろ?嫌いなんだよ、面倒な女は。今のお前、すっげー面倒。」

癪に障る。ものすごくムカつく。たぶんそれは、自分でも分かっているからだ。

圭吾が投げってくる言葉が、奥の奥まで届く。

寂しかった。誰かに甘えたかった。だが一方で、それを圭吾に望んでも得られないことは分かっていた。優しくしてくれる男ならたく

さん知っている。その男たちが本心から繭を想い優しくしてくれるのではないことも知っている。男達が見ているのは、一人の人間としての繭ではなく、女子高生というブランドをぶら下げた簡単に抱ける女だ。

「ごめん。」

やっと分かった気がする。何故圭吾だったのか。

圭吾にとって繭が都合がいい女であることは間違いないが、圭吾は繭を抱くために繭に優しくするようなことはしない。いらないものは、いらないと言う。間違っているものは、間違っているとと言う。女のためなんかに媚をうるような真似を彼は絶対にしない。つまり、繭を道具として扱わない男は、隆を除けば圭吾だけだ。

「ったく、どうしようもないな。」

引き寄せられて、顔が埋まる。途端に圭吾のシャツが湿っぽくなる。近ごろ涙もろくなってしまったようだ。とまらない涙が、シャツに大きなシミをつくった。

シミの下にあるのは、透き通った肌。繭が大好きな圭吾の一部。

圭吾は最初から気づいていたのだろう。繭がいつかこうなることに髪型であつたり服装であつたり、隆と一緒にいる間に繭に起こった小さな変化を、圭吾は見逃してはいなかった。

いや、圭吾だから見逃せなかったのだ。特定の女を作れない、他人に踏み込むことも踏み込まれることも好まない、圭吾だから。

隆にさえ出会わなければ、ただ圭吾を受け入れていればいいだけだった。好きだと思いながら、届かないと思いながら、手を伸ばすことを諦めていればいいだけだった。

だけど、変わってしまったのだ。

繭の中の何かが、確かに形を変えてしまった。

「繭ちゃん。」

長くて短かった高校生活最後の夏休みも終わりを告げ、気持ちも新たに始まった2学期。

センター組の放課後課外の日数が増えてから、繭は一人で学校を出ることが多くなった。

出来のいい友人ばかりを持つと何かと寂しい思いをするらしい。

通常の学校の授業を終えると、今日も憂鬱な一人下校の時間を迎えたところだった。

校門の外に停まっていた高級車には、すぐに気がついた。

それが誰の車であるのかも、薄々検討はついていた。だから校門を出て歩き出した矢先、背後から繭を呼んだのが誰かということも、振りかえる前から分かっていた。

「久しぶり。」

そこそこ上手く笑えたと思う。その証拠に、隆も安堵したように笑い「久しぶりだね。」と返してくる。隆からの電話を全て無視している手前平然としているのも気が引けるのだが、隆が繭を責めるためにここにいるのではないことが窺えると、心の中でホッと息をついた。

「少し時間ももらえない?。」

時間はある。たっぷりある。というのも今日に限ってバイトが入っていないからだ。友人たちですらしっかりと把握していない繭のバイトの予定を、当然隆は知りもしないだろう。

「いいけど。」

いずれ隆とはきちんと話をする必要があると思っていた。出来れば

このまま話をせず、忘れていければとも何処かで思っていた。良かったような、良くなかったような……。気分は複雑でも、すでに隆はここにいるのだ。逃げ出すわけにはいかない。

隆に促され、久しぶりに乗る助手席の座り心地に懐かしさを感じて微かに笑うと、訝しげに繭を見た隆に、何でもないという意味をこめて首を横に振って見せた。何処に行くのかと尋ねれば、しばらく唸っていた隆が「俺の部屋でもいいかな?。」と申し訳なそうに言う。

「絶対に何もしないから。ただ二人でゆっくり話しが出来る場所が、他に思いつかなくて。」

部屋に誘っているのに、絶対何もしないという男のセリフほど胡散臭いものはない。隆の場合、本気で手を出す気がないと十分わかっているけれど、このセリフはあまりいただけないかと、苦笑しながら承諾した。

隆が一人で暮らしているというマンションは、学校から程遠くない場所にあった。意外と繭の家からも近いことに驚き、よく今まで偶然会わなかったものだと思痛がしてくる。隆と会って間もない頃、この辺りのマンションの前で隆はこういうところに住んでいそうだと冗談まじりに思ったものだが、どこまでも予想を裏切らない隆が「ここだよ。」と指したのは、この辺りでも超がつくほど高級で有名なタワーマンションだった。

マンションの敷地内にある駐車場に停めた車を降りた後、ビクビクと怯みながら隆の後をついていく。慣れた手つきでオートロックをはずした隆が、まるでそれが当たり前のようなさりげなさで、繭の右手をとった。初対面の日からどこを歩くときでも手を握ってくる隆だ。あの時とは事情は違えど今更驚きもしない。むしろ、手を握られたことで安心している自分の方に、繭は驚きを隠せないでいた。

広い広いエントランスとロビーを抜け、エレベーターにのりこむ。ゆっくりと上を目指しのぼっていく中で、足が竦む。高いところは嫌いだ。ようするに、高所恐怖症。顔を悪くする繭に気がついたのか、隆が「大丈夫?。」と声をかけてくる。大丈夫ではないけれど、我を失ってしまうほど酷いわけでもない。多少顔を引きつらせながらも、黙って頷いた。握っている手が汗ばんでいることは、きつと隆も気がついていいるだろう。変なところで弱みを見せてしまったと気にしている内に、エレベーターのランプが23階を点滅させ、静かに扉が開いた。

さすが高級マンションというべきだろうか。玄関の鍵は2重ロックになっている。泥棒が入っても盗む物がない繭の家では、家族全員の防犯意識が薄すぎる。2重ロックどころか、たまに玄関のドアの鍵が開けっ放しになっていることもあるぐらいだ。物珍しそうに見ている繭を見て、隆が笑いをこらえたような声をだす。そんな隆を不快に思いながらも、促されるままに部屋の中へと足を踏み入れた。

外観から想像したほど、中は広さを感じなかった。通されたリビングから他の部屋へ続くドアは2つ。2LDKと見てまず間違いはないだろう。全体的に物は少ない。今まで入ったどの男の部屋よりも、センスも良いし綺麗に片付けられている。

「適当に座って。」と言いながら、置かれているアイボリー色の2人掛けソファを隆が指した。言われるがままにソファに座ると、部屋の窓のカーテンが開き、外の光が射し込んでくる。あの窓からはきつと、素晴らしい景色が眺められるのだろう。絶対近づきたくないけれど・・・。

飲み物はオレンジジュースでいいかと問われ、繭はコクリと頷いた。お気遣いなくと言いたいところだが、喉はカラカラに渴いている。ホテルのレストランのボーイを思い出せるスマートさでトレーにジ

ユースとコーヒーをのせて戻ってきた隆が、ガラスのテーブルにそれらを並べ、繭の隣に腰をおろした。「ありがとう。」とジューズを口を含みながら、顔を上げた先にあるテレビが大きすぎることにまた驚く。さすがに薄型テレビぐらいは繭の家にもあるが、これほど大きなものではない。一頻り部屋の観察を終え、本当に隆がお金もちなんだということが改めて分かると、隣で一緒に並んでいることに申し訳なささを感じてきた。

「髪、少し伸びてきたね。」

「え？あー、うん。」

本来なら一カ月に一度は行く美容室も、ストレートになって手間がかからなくなったせいで、隆に連れて行かれたのを最後に行っていない。言われてみれば確かに伸びたかもしれないと、無意識に髪に手が伸びる。

「あの美容室、繭ちゃん気に入らなかったみたいだから、今度また別のところ探しくよ。」

笑顔でそう言う隆の『今度』という部分が引っかかり、繭は隆と視線を合わせた。

今度なんてあるわけがない。今日繭は、隆との関係を終わらせる為にここににいるのだから。

それに気づいたのだらう。「あー……。そうだね……。」と隆が声のトーンをおとした。

「あの時……。俺と元の話……。聞いてた？」

今更隠しても仕方がないことだ。隆も確認の為に聞いてきたんだらうと、繭は頷く。

「そうか……。そうだね……。」

何か考えているのか、言葉を選んでいるのか、部屋の中に、大きな身体を小さく丸めた隆の息を吐き出す音だけが響いた。

「あのさ、私、恵の代わりにはなれないよ？。」

「・・・いや、代わりなんて、繭ちゃんは繭ちゃんだし・・・。」

「私は圭吾の・・・中岡くんの代わりにしようとしてたよ、隆くんのこと。気づいたでしょ？私、あの人がずっと好きなんだよ。でも、満たされないの。圭吾が私を好きにならないことが分かってるからだから他の人で埋めようとして・・・。だけど、違うんだよね。やつと分かったよ。誰も圭吾の代わりになんかならなかった。」

一気に言い切った繭に、隆が啞然としている。それはそうだろう。

繭は今まで一度だって、隆にはつきりと自分の意思を伝えようとはしてこなかった。まして、自分が誰かの代わりだったと断言されたのだ。例え気がついていても驚くだろうし、もしかしたら、傷つけてしまいかもしれない。それでも言わなければならぬのだ。先に進むためには、避けては通れない路がある。

「もういいでしょ？隆くん。本音で話そうよ。そのために隆くんは私をここに連れてきたんでしょ？」

「待って、繭ちゃん。ちょっと待って。俺は・・・。」

「だからもうさ、いいんだって。私も隆くんと同じなんだし、傷つけないから。」

「ちが・・・。」

「私は圭吾が好き。隆くんは恵が好き。それだけなんだよ。私たちの間には最初から何もない。何もないんだから、終わることだって・・・。」

「待ってって言ってるだろ。」

人間誰しも大なり小なりそうだろうが、感情が高ぶると隆は命令口調になるらしい。怒鳴られたのは今日で2度目。ホテルで笑うなど言われ、今日は待て、と。

怒鳴られれば、やはり怯む。でも不思議と恐く感じないのは、隆の人柄をよく知っているからだろう。

「確かに、恵ちゃんのこととは好きだよ。元から彼女だと紹介されたときからずっと。恵ちゃんに紹介したい子がいるって言われたときには、少なからずシヨックもつけたし・・・。だけど、最終的に繭

ちゃんを紹介して欲しいと恵ちゃんに頼んだのは、俺だから。」

「・・・え?。」

「繭ちゃんのことは、事前に恵ちゃんから聞いてた。とは言っても学校で噂されている程度のことだけだね。どうしてだろう?と思うんだ。すぐ興味がわいて、繭ちゃんに実際会ってからは、余計に分からなくて。こんなに可愛い子なのに勿体無いなあーって。」

興味本位、面白半分。被害妄想なのか、繭にはそう聞こえてしまう。好奇心旺盛なんですね、と皮肉の一言でも言ってやろうかと思ったが、バカらしくなって口を噤んだまま隆の話の続きを待った。

「繭ちゃんに誘われたときには、さすがに参ったよ。そんなつもりじゃなかったし、恵ちゃんのこともあったから・・・。でもあの時、ホテルで会った彼への繭ちゃんの態度を見て、やっと繭ちゃんのとが分かったんだ。繭ちゃんが、何ていうか、すごく・・・。」

「可哀想だった?。」

「え?。」

「可哀想な女って、同情した?。」

自分はなんて勝手な生き物なのだと思う。繭が隆に抱いた思いが、そのまま自分に返ってきただけだというのに何故こんなに頭にくるのだろう。同情なんてされても全然嬉しくない。同情しているのが隆だというのが、余計に頭にくる。

「違うよ、俺は繭ちゃんを・・・。」

「もういい。聞きたくない。」

「繭ちゃ・・・。」

「聞きたくないって言うてるの。同情なんかされたくない。何が繭ちゃんのことが分かった?分かるわけない。隆くんなんか絶対に絶対分かるわけがない。私はこれでいいから。圭吾のことを好きで、圭吾に抱かれて他の男に抱かれて、私はこのままでいいから。私の事抱けもしないくせに、もう私の邪魔しないで、かきまわさないで。」
「いいわけない。いいはずがない。圭吾の代わりはいないと言いながら、このままでいいと言っている。矛盾していると気づいたのは言

ってしまった後で、取り乱したことを恥ずかしく思ったのは、それよりもっと後だ。

視界がぐらんと揺れて、背中がソファの上で弾む。腕が自由にならないことに気づいたとき、隆に押し倒されている現状を把握した。絶対に何もしないと言っていた人の顔が、苦しそうに歪む。

「抱けばいいわけ？いいよ。それで繭ちゃんが救われるなら、俺がその役引き受けてあげるよ。」

違う、そうじゃない。その役は、隆じゃだめだ。圭吾以外の男は、皆、繭より格下でなければならない。例え男たちの本心が違おうが、繭に優しくして、気をつかって、繭を抱くために平気でプライドを投げ捨てる。そういう男でなければいけないのだ。繭を自由に扱えるのは、圭吾だけ。そうして差をつけることで、自分が圭吾以外の男と関係を持つことに納得してきた。繭を抱いて傷つく男なんかに、繭の傷を癒せるはずがない。

言葉を発す前に、唇は塞がれていた。制服が上に捲し上げられる。恐くはない、全然怖くない。それどころか・・・泣けてくる。

目を瞑らずに、ただ隆の顔を見つめていた。苦しそうに歪む顔。そうさせているのは繭なのか、それとも・・・

「もう・・・やめなよ。」

隆の手が動きを止める。やっと繭の顔を見た隆は、寂しそうにも、安心して見るようにも見えた。

「大人だね・・・。繭ちゃんは。」

倒れるように繭の胸に顔を埋めてきた隆が、力なく呟き。気がつけば繭は、隆の頭に手を伸ばしそつと撫でていた。これが母性本能というやつだろうか。随分と大きな子供だけど。

「俺を助けてよ、繭ちゃん。」

やっと搾り出したような隆の声は、震えていた。これがこの人の苦しみ。

今までずっと抑えてきた想い。

「いいよ。」

隆に繭が必要だとは思わない。繭にも隆が必要だとは思わない。だが、それはそれでいいのだろう。必要か必要じゃないかなんて、そんなのどうでもいい。今、隆が助けを求めているのは、繭だ。そして繭もそれに応えようとしている。これが全て。今はこれでいいのだろう。

「助けてあげる。だけどそれには、。」

どうしても、やっておかなければならないことがある。

心臓は、煩い音を立てっぱなしだ。吐き気すら襲ってくるほどに。自分で言い出したことながら、この場に立つと何てことを言ってしまったのだらうと繭は後悔していた。

「で？話って？。」

シャンプーは何を使っているのだらう。トリートメントは何を使っているのだらう。今日もサラサラの茶色い髪を見ながら、どこでもいいことに意識がとぶ。どうしてそんなに肌が綺麗なんだらう。どうしてその目は人を惹きつけるのだらう。初めて会った日から、ずっと片思いをしてきた相手。何度も同じベッドの上で、身体を重ねてきた男。

ほんの10分前まで、いつもと同じように二人で働いていた。繭が注文を受けて、圭吾が調理する。最初は覚束なかった連携プレイも、時と共に息が合うようになっていた。まだ数ヶ月、繭はバイトを続けるつもりだ。その度に、圭吾と顔を合わすことになる。大丈夫だろうかと不安になる。圭吾ではなく、自分が大丈夫だろうか。

学校の制服である白いシャツがよく似合う圭吾が、バイクに軽く体重を預ける。繭が口を開くのを待っているのだ。帰ろうとする圭吾を話しがあると呼びとめたのは繭なのだから、当然といえば当然である。

「ちょっと待ってね。」と大きく深呼吸。

いざとなるとこんなものだ。気が強いくせに、小心者。練習どおりに言えばいい。そのために家であんなに練習したのだから。

「私ね。」

そこまで声に出して、圭吾を真っ直ぐに見た。目を逸らさないと決

めてきた。絶対に逸らさないと決めていた。

「圭吾のことが、ずっと好きだった。」

圭吾の目元がピクリと動く。だけど直ぐに宙を仰ぐ。プツと吹き出した口元を見て、繭の全身から力が抜けた。

「勝手な女。」

そう言われて、繭も笑ってしまう。

圭吾のことが好きだった。好きで好きでたまらなかった。けれど繭は、もう圭吾といることを望まない。圭吾の言うとおり勝手なのだ。そんな自分に笑ってしまった。

「返事はいらないんだろ?。」そう聞かれ頷いた繭に、「本当に勝手な女。」と圭吾がまた呟く。

後悔を残さないためには、これがベストな選択だった。少なくとも繭はそう思っている。

例えばそれが間違っていたとして、繭が選んだのは圭吾ではなく、隆だから。

「ありがとう。」

自然と口が動いていた。

「お礼言われるようなことしたっけ?。」と、圭吾は苦笑する。

こんなに誰かを好きになれたこと。それは、繭にとっては大きな価値があった。圭吾で良かった、と思う。好きになった男が、圭吾で良かった。

「バイト仲間としてぐらいは、付き合ってくれるんだろ?。」

有り難い圭吾の申し出に、「うん。」と繭は頷く。

「あと半年もないけど。」

「そうだな。」

「ごめん。それじゃ帰るね。ありがとう、圭吾。」

「ああ。」

「バイバイ。」

「・・・ああ。」

本当にこれで最後なのだ。そう思うと、まだ繭の心は揺れる。だが、一つの区切りをつけられた事で、気分が晴れたのも事実だった。

圭吾に背を向けて歩き出した足も、心なしか軽い気がする。

「繭。」

名前を呼ばれて立ち止まる。顔だけを圭吾に向ければ、

「がんばれよ。」

そこにあるのは、好きだった男の笑顔。

本当に中岡圭吾という男は……。

「もう頑張ってるよ。」

滲んできた涙を拭い、繭もとびっきりの笑顔を返した。

涼しい風、綺麗な月。

このまま家に帰るのが惜しくなるぐらい気持ちのいい夜だ。

今頃隆はどうしているだろうと、この空の下、共に戦いに挑んでいくはずの男を想う。

泣いているだろうか、笑っているだろうか。

隆のことだ。あの爽やかスマイルを浮かべながら、ボロボロに傷ついているに違いない。

何しろ相手は恵だから……。圭吾のようにいかないのは、目に見えている。

静かな住宅街を抜けようとした直前、携帯が大きな音を響かせ慌ててマナーモードに切り替えた。

携帯が知らせたのはメールの受信。差出人は、ボロボロの男。

「あーあ。」

内容を見て思わずため息がでる。

「私が慰めて欲しいんだけどなー。」

携帯を手にしたまま方向転換した足は、駅へと向かって走り出していた。

E
N
D

10（後書き）

「Shake」完結です。

まだこれから成長していく登場人物たちの一過性な恋愛を描きたかったのですが、分かりにくすぎると知人には言われてしまいました。ですが私個人としては、案外気にいっている話でもあります。

読者登録して下さった皆様、読んでいただいた皆様には、毎回ながら心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7872m/>

Shake

2011年7月29日12時09分発行